

花蔭の人

矢田津世子の生涯

近藤富枝

花蔭の人

矢田津世子の生涯

花蔭の人

矢田津世子の生涯

近藤富枝

講談社

花蔭はなかげの人 — 矢田津世子の生涯

昭和五十三年五月二十日第一刷発行

著者 — 近藤富枝

© Tomie Kondo 1978, Printed in Japan



発行者 — 野間省一

発行所 — 株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三—四五—二二 振替東京—三三

印刷所 — 豊国印刷株式会社 製本所 — 藤沢製本株式会社

定価 — 九八〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0095-128999-2253 (0)

(文1)

花蔭の人

矢田津世子の生涯

近藤富枝

講談社

蔓草の女たち 140

安吾ふたたび 148

赤い夕陽 161

稔りのとき 168

天女散華 178

最後の恋 192

水あじみ 208

香を薰く 220

おわりに 229

矢田津世子年譜 232

参考文献 245

装帧
枡折久美子

花蔭はなかげの人

——矢田津世子の生涯

まえがき

作家矢田津世子は、昭和十九年三月、満三十七歳の若さで、肺患のために逝った。いま、その作品を手にとろうとすれば、現代日本文学全集（筑摩書房版）の、昭和小説集（二）のなかに、代表作の「神楽坂」が一篇とられているのを、発見するにすぎない。

しかし彼女は「神楽坂」の出た、昭和十一年の文壇では、華やかな人気作家の一人であった。しかも、文壇一の美女とうたわれ、坂口安吾の深い思慕を受けてもいた。

私の親戚に、菊富士ホテルという文士の宿があり、数年前にその伝記を書いているとき、矢田津世子が宿泊人のひとりであったと教えられた。これが、彼女の生涯に興味をもつ、はじめであった。

そして私は、矢田津世子が女流作家として開眼に至るまでの、泥にまみれ、傷つきながらの精進のいたましさに、心を打たれた。また津世子の時代が『女人芸術』を生み、多くの女流作家を輩出し、彼女たちがしのぎを削って文壇の席の争奪戦を演じるさまのすさまじさにも、目

をみはった。

しかし謎の多い彼女の生涯にわけいるのは、調べが進めば進むほど、樹海のなかを、混沌としてさまように似ていた。

若い日の津世子は、若いままに野心家であった。あせり、背のびをし、功を急ぎ、そのため周囲から傷めつけられて、生涯拭えない汚点を、身に刻まれた。

が、年とともに彼女は一つずつ虚飾をかなぐり捨てて、弱い肉体を支えながら、晩年のその人は、文学一すじに、凄絶を極めた。

この書は、昭和初期の女流作家たちのモニュメントであり、ひとりの女人が、作家を志すとき直面する谷や淵を、津世子を通して眺めたものである。

台地にて

妙正寺川の谷地にある、西武新宿線の中井駅を降り、線路と直角に、駅の上を真北に走っている山手通り（環状6号線）に昇ると、いっぺんに眺望がひらける。

この山手通りを北に三百メートルほどいくと、東京には珍らしく木立の多い稜線が東西に伸びている。下落合の台地である。妙正寺川に沿って、この台地の裾を走る道路から、台上に登る坂道には、東側から順に、一から八までの番号がついている。

矢田津世子の終焉の家は、「一の坂」と山手通りのぶつかる交差点の崖の上にあった。

昭和の初年ごろ、「四の坂」には林芙美子、「五の坂」には吉屋信子が住み、神近市子、大田洋子、板垣直子、奥むめお、軽部清子、壺井栄などが、その周辺に住んでいたというから、女流文士村の趣きさえあった。

また尾崎一雄の「なめくち横丁」も、会津八一の「秋艸堂」^{しゅうそうどう}も、この台地にほど近いときいている。そしてこの坂を訪ねる人、訪ねられる人、さまざまな想いをいだきながら、多くの女

流たちが、毎日上ったり、下りたりしたと思うと、私は感慨を誘われるのであった。

このなかで昭和十年まで住んでいた吉屋信子邸、林芙美子邸、矢田津世子邸は、往時のままに残っている。ことに林家は、林芙美子の夫の緑敏氏が守り、矢田家には、津世子の兄、不二郎氏が現存する。

一月のある曇り日の午後、私は思い叶って矢田家を訪問することができた。通されたやや暗い応接間には、初版の芥川全集などが飾られてある。そして、主の心づくしのだろう、机上に香がくゆらされていたが、その一すじの煙が、あたかも女流作家矢田津世子の過去をよびもどす招魂の護摩かと、私には思えたのである。

不二郎氏は七十五歳、きっちり半世紀をつとめ、社長の位置にまでついた保険会社を退いて、いまは姪ごさんなど二人の女性に侍かれて、悠々自適の生活である。

昭和五十年文化の日には、長年の保険業界における業績に対し、勲四等瑞宝章を授けられた。

「津世、いい子だったなア、とてもいい子。やさしい、素直な、あんな子、もうどこにもいないア」

笑みこぼれて、太い長者眉を下げ、不二郎氏はまるで詩を朗読するような、感情をこめた調子で言う。

津世子と親しく交際のあった、ロシア文学者の湯浅芳子氏は、矢田津世子を書きたいと言ったとき、

「お兄さんに逢ってごらん。あの人と津世子さんとは、この世ならぬ兄妹愛で深く結ばれていたからね」

と言われたことを、私は改めて胸のなかで反芻した。

「どこにもいないなア」と言ったとき、不二郎氏の笑い顔が、いっぺんに泣きべそをかけたように、見えたからである。

矢田家は戦災を免れている。家の前に山手通りができるときに、敷地を削られ、そのため、階下の玄関や応接間に手が加わったが、居間や二階は津世子在世のころのままである。

しかも、かつて津世子の部屋だったところは、わざと往時のままになっていて、手つかずの原稿用紙も積まれてあるという。つまり不二郎氏は、三十三年後のいまも、なきひとの思い出にたっぷり耽りながら、日々を過しているというわけである。

酔うと、「津世、津世」と呟くのがくせ。その妹への執着は、

「そう、あれが死んだときも、わしはとうとう、かたみわけもしなかった。一番津世が親しかった大谷藤子さんにも、裂っぱしひとつやらない。惜しくて惜しくて、津世のものは、誰にもやりたくなかったのよ」

という述懐でもしれよう。

なるほど、不二郎氏が長年妻という名の人を作らなかつたのは、妹以上の女性にめぐりあわなかつたせいだ、という世間の噂も、的を射ているように思う。あるいは不二郎氏の胸のなかに住む、津世子の像の大きさに驚ろいて、多くの女性が、彼のそばを素通りしたということか

もしれない。

矢田津世子は、長い間忘れられていたけれど、最近坂口安吾への関心がたかまって、坂口の永遠の恋人である津世子に興味を持つ人が多くなった。しかし彼らが津世子を、作家として正當に評価することなく、安吾の恋の相手としてのみライトを当てることに、不二郎氏は当然ながら不満を持っている。

私はその日、津世子の生涯のさまざまなことについて、不二郎氏にたくさん質問を浴びせたのだが、案に相違して、どの質問にもこころよくこたえてくださった。

しかも、こたえることが、もう楽しくてたまらないという、法悦のような心境なのか、いつもその唇から笑いを離さない。

「津世子の小説は、私が手をとって教えた。何もかも。津世子の親しい友人たちとも、みな私はつきあった。お芙美さん（林）も、私の名古屋のうちへとまったことがある。お芙美さんのお母さんも、しょっちゅう遊びにきていました。吉屋信子さん、湯浅芳子さん、軽部清子さん、いっしょにめしを食った仲です」

帝国大学出身の不二郎氏は、もうそれだけで、津世子にとってはまばゆい存在であり、彼女が兄をどんなに力にしていたかは想像できる。

ところが、いったん話が津世子の文壇登場にまつわる有名なスキャンダル事件などに及ぶと、この兄は、氣迫を眉宇にただよわせて、ケチをつけるものは許さないぞという姿勢を示すのである。もちろん、坂口安吾との恋愛も、すべて抹殺である。私の津世子伝にとっても、き

びしい検閲者となるにちがいないと、早くも案じられた。

窓の外は、たそがれが濃くなった。私が腰をうかすと、「まア、まア」と手で制しながら、次のような津世子の追想が、不二郎氏の口から流れ出したのである。

「いつのことでしたか。もう津世子のからだが変わって、外出もめつたにしくなつたところです。川端康成さんから『八雲』に原稿を書くようにといわれ、津世は徹夜をし胸に氷を当てながら書いたのです。私は『やられるなア』と思い、何どとめたことか。果して書き終ると、病気がすすんでもよいです。ところがある日、川端さんがごていねいにも、その作品をうちまで返しに見えたんです。川端さんには津世の命をかけてかいたその作品のねうちが、わからなかつたんだとわしは思います。ムゴイ、ほんとうにムゴイ。津世子はこの事件で結局、命をおとしたと私は見ているのです」

息をつめて私は、不二郎氏の言葉を聞いていた。

矢田津世子は生前けつして才気ほとばしるといった態の器用な作家ではなかつた。のたうつ苦しみを自らに課して、あえぎながら作品を生み出す、苦渋派の女流であつた。『八雲』という檜舞台へえらばれたことの喜びとともに、誠実な彼女が、どのようにその責任を強く感じたか、同じものかく人間として、痛いほどに私はわかるのである。

「それは、何という作品でしょう。どんな内容の」

私は乗り出して聞かずにはいられなかつた。

「忘れましてねえ、題は。でもそれは真間の手児奈を材料としたものじゃないの。あのころ津

世は、素朴な民話や伝承に興味をもっていたからねえ。『鴻ノ巣女房』なんて作品が津世にあるでしょう。それからつながっていますよ。人間社会の象徴としての民話を書きたかったんじゃないの。

これは思いつきではなく、津世にはよほど深いたくらみがあった。その二、三年前に津世は、フランス語で出す満州国宣伝の雑誌に、手児奈のことを紹介したことがあった。そのころから、暖めていた材料です。

それだけに自信があったものです。また真間の手児奈の思いつめたきもちは、津世にはよくわかっていたはず。何故って、津世はずいぶん、いろんな人に愛されましたもの。真間の手児奈は津世じゃないの。つまり、もう晩年の津世は、人間がいやになっていたのよ。

だから、津世が手児奈を書いたきもち、私にはわかるんだなア」

川端康成ほどの目ききならば、自分の編集する『八雲』にのせる作品は、とりわけ粒をそろえ、きびしい選択を行ったにちがいない。とはいえ、心魂を傾けて書いた苦心の作を、否定された津世子の恨みも、浅くはなかったであろう。

「見せてください。その作品を」

私は思わず叫んでいた。

「こちらに原稿があるのですね」

「そう。津世のものは、チリッパ一つ散らさず全部のこしてあります。さがしたらあるかもしれません。あなたは津世の性格をご存じありませんか。あれは、どんなものでも整理して、キ